



紙つぶて

富士山測候所の設立には明治の気象学者、野中至・千代子夫妻の英雄的な秋冬季観測がそのもとになっていることは、新田

次郎の小説「芙蓉の人」にも取り上げられた有名な話です。その後、野中さんの活動を陰で支えていたのが、三井銀行に勤めていた広瀬さんでした。銀行員としての仕事の傍ら富士山にたびたび登り、山岳気象研究の草分けとして知られています。野中、広瀬さんの友情は、家族同士の付き合いに発展しました。

一九三三年、第二次国際極年に一年予算で富士山頂の観測が行われ、七十二年間の有人観測に続くのですが、開始時は予算の裏付けがなく、後の名物測候所長・藤村郁雄さんら若い技術者が、食料を運びクジを覚悟で越年観測のため山に残りました。そ

野中至と広瀬潔

の熱意に承えて金策に走り回った岡田武松中央気象台長を、広瀬さんの縁で「三井報恩会」が金銭援助したのです。三四年には「測候所閉鎖の難を免る」と新聞で報じられました。

二〇〇七年以来、私たちが行っている旧富士山測候所の活用経費は、年間三千万円近くになります。海洋研究開発機構との共同研究や国立環境研などからの委託事業、年賀寄附金に支えられ、一〇年からは三井物産環境基金の助成が中心です。

三年間の助成が今年十月初めに再度認められたときは八十年前の技術者たちの感動



もかくやと思いました。団体は違いますが同じ「三井」

の名に縁を感じています。

(土器屋 由紀子＝富士山

測候所を活用する会理事)